

## レタスビッグベイン病に対するpH降下型肥料の開発と現地適応性の確認

レタスビッグベイン病が発生しにくい土壤環境に整えるpH降下型肥料を民間企業等と共同開発し、現地適応性を検討した。その結果、効果が確認できたので、本肥料の使用方法を含めた防除対策をまとめた「レタスビッグベイン病対策の手引き」を作成し、関係機関に配布した。

### 内 容

「次世代農林水産業創造技術」事業を活用して、ジェイカムアグリ株式会社、神戸大学の3者と共同研究を行い、土壤のpHを降下させることにより、レタスビッグベイン病を媒介する菌が活動しにくい土壤環境に整える新しい肥料を開発した（本誌2016年No.194、2017年No.198参照）。

2017年6月に肥料登録・商品化され、秋以降に南あわじ市の複数の現地圃場で実証試験を行った。その結果、圃場の土壤汚染程度により差はあるものの、慣行肥料区に対して一定の効果が認められた（図）。

2018年度現地で導入されている耐病性品種や殺菌剤の定植時<sup>かん</sup>灌注処理との組み合わせ防除体系を現地圃場で検討した。慣行肥料区で平均発病度が13.5のところ、pH降下型肥料区では4.3、さらに

殺菌剤の灌注を組み合わせると1.3まで発病が減り、慣行肥料区に対する防除価が90.7となり、実用性を確認した（表）。この肥料のコストは慣行の肥料と同等であり、使い方も同じである。

2019年1月には共同研究機関等と、これまで開発してきた防除法及び、pH降下型肥料の使い方などを加えた「レタスビッグベイン病の防除対策の手引きVer.1」を作成し、現地に配布した。

### 今後の方針

J Aの栽培暦への採用を目指し、メーカーや現地指導機関と連携した活動を行っていく予定である。

松浦 克成（企画調整・経営支援部  
前：病害虫部）

（問い合わせ先 電話： 0790-47-2447）

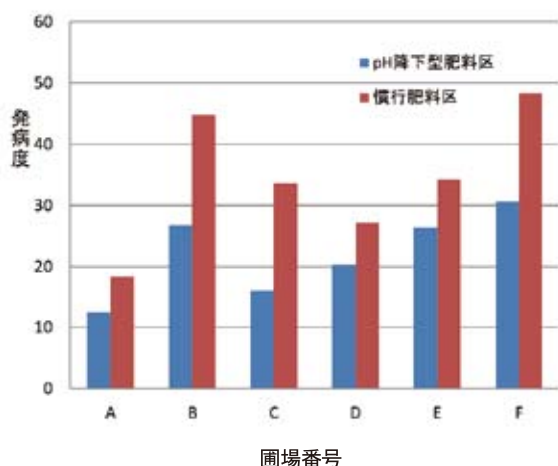


図 pH降下型肥料によるレタスビッグベイン病に対する効果（南あわじ市現地圃場 2017年）

表 pH降下型肥料と殺菌剤によるレタスビッグベイン病

病への影響（南あわじ市現地圃場 2018年）

施肥*	殺菌剤灌注**	平均発病株率(%)	平均発病度	防除価
pH降下型肥料区	○	5	1.3	90.7
pH降下型肥料区	×	17	4.3	68.5
慣行肥料区	○	8	2.3	83.3
慣行肥料区	×	44	13.5	—

品種：LE333 播種日：2018年9月26日 定植日：10月22日

調査日：12月27日

\*各肥料は全層施用。慣行肥料はスーパーエムコートS066を使用

\*\*定植時灌注処理はアミスター20フロアブル2000倍3L/m<sup>2</sup>処理